



## クランツ標本 – 東京大学最古の標本群

宮本 英昭（総合研究博物館 准教授，地球惑星科学専攻 准教授 兼任）

地球には多種多様な岩石や鉱物、化石が存在している。博物学が明らかにしたこの重要な事実は、地球という天体の生い立ちや表層環境の歴史、さらにはその上に誕生した生命体の進化を理解する上で、実は本質的に重要である。地球表層の多様性を系統的に理解するには、地球の一部を切り取ることで形成された、典型的かつ多種類の実物標本を手にとって観察することがもっとも早道である。こうした理由から、地質学や鉱物学、古生物学分野では、実物標本が研究・教育上不可欠な存在となっている。理学部地質学教室・鉱物学教室（現在の地球環境学科）の歴史において、その基礎教育を担うもっとも重要な役割を果たした標本群といえるのが、ここで紹介するクランツ（Krantz）標本である。そのごく一部を表紙と裏表紙に示す。この標本は東京大学最古の標本群であると言われており、その履歴を語るには、明治初期までさかのぼらなくてはならない。

急速な近代化を推し進めた明治政府は、

それを担う優秀な人材こそが近代化の基盤であると認識していた。1873年（明治6年）4月に第一大学区第一番中学が開成学校と改称されたが、その開業式に明治天皇や三条実美、板垣退助、伊藤博文など錚々たる列席者の姿があったことから、国家事業として重要な位置にあったことが理解できる。その開成学校の一部である鉱山学校（ドイツ部）が、約150点の鉱物標本を外国から購入しているが、これが恐らくクランツ標本の最初の収集品である。

翌年5月に開成学校が東京開成学校と改称されてからも、政府は引き続き多額の予算を重点的に配分した。東京開成学校は、1874年（明治7年）に博物学用品4種を、翌年には鉱物標本75点を購入している。これらの少なくとも一部はドイツ・ボンにあるクランツ商会から入手していた（筆者は田賀井篤平名誉教授がクランツ商会に調査に行ったさいに、クランツ夫人に注文書を見せてもらったという逸話を聞いた）。翌1875年（明治8年）には、イギリスの化石標本1000点、岩石標本200点、フランスの鉱物標本400点、ドイツの鉱物分析器械および薬品一式などが納入されたと文部省第三年報（1875）に記述がある。なお、神保（1903）によれば、クランツ商会より鉱物標本1000点、結晶模型数100点、石版摺りの結晶図が納品されたとされている。つまり開成学校および東京開成学校の頃に、数多くの鉱物・岩石・鉱石・化石標本がドイツなどから購入され、その中核をなしていたのがクランツ商会から購入したクランツ標本であつたらしい。なおクランツ商会とは、

1833年にアダム・クランツ（Adam August Krantz）によって設立された会社で、当時から世界的に有名な鉱物・岩石・化石標本の取り扱い商であった。

1877年（明治10年）になると、東京開成学校と東京医学校が合併して東京大学が創立される。理学部の初代教授であるモース（Edward S. Morse）は博物館の重要性を大学当局に説き、1879年（明治12年）に東京大学理学部博物館が完成し、標本・資料が展示されたという。ところが理学部の移転と共に博物館はなくなり、標本・資料は各教室の標本室に分散され保存されるようになってしまった。その後地質学教室は、終戦後の理学部2号館に移るまでに、少なくとも1885年（明治18年）、1888年（明治21年）、1893年（明治26年）、1910年（明治43年）、1934年（昭和9年）、1945年（昭和20年）に移動しており、標本も幾度となく引越しを経験した可能性が高い。

このような経緯を考えると標本が散逸しなかったのは奇跡的であるが、その学術的な高い価値を理解した先人たちの献身的な努力の賜物であろう。幸い1966年（昭和41年）に、総合研究博物館の前進である資料館に収蔵されることとなったため、総数1万点以上の岩石・鉱物・化石標本からなるクランツ標本は、過去の地球環境や生命の営みを如実に語る存在として、現在も総合研究博物館で大切に保管されている。



クランツ商会の設立者、アダム・クランツ（Adam August Krantz）（クランツ商会提供）

参考文献：田賀井篤平編・東京大学コレクション XIV クランツ鉱物化石標本、東京大学総合研究博物館発行、121pp、2002